

芥川賞作家 高城修三氏 講演会

芥川賞作家高城修三氏講演会は10月17日（日）19時から支所センターで開催されました。前日までの温かな気温が急に冷え込んで、生憎の肌寒い夕べでしたが、大変多くの方々に来場して頂きました。しかも新型コロナ感染拡大で、10月開催を危惧していましたが、運よく緊急事態宣言も解除され、3密回避を十分に心がけながら、内容の濃密な2時間半の講演会が実現しました。



お話は、配布された「連歌の流れ」という歴史資料に沿って進行しました。万葉集や古今和歌集から始まり、江戸時代の松尾芭蕉に至るまで栄えてきた連歌の伝統が、明治時代になって、正岡子規によって否定されるというショッキングな事実が語られます。すなわち個性の絶対化と場を否定する西欧近代文学の理念が、明治時代の日本に流入するやいなや、日本的伝統としての連歌が、正岡子規によって否定されたのです。「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」、つまり、連歌は、発句と連俳の総合なのですが、芭蕉の俳句（発句）は文学だけれども、その発句に、色々な人々によってつぎ足される連俳は、文学ではない、というのです。そういう正岡子規の連歌拒否宣言に対して、高城氏は、連歌を「異質なものを出会わせ、思いがけないイメージや発想を生み出す装置」であるとして、応援し、肯定するのです。そして現代の「人生百年時代における座の文学（連歌）の可能性」を主張するのです。

あっという間の2時間のお話の後、沢山の質問がでて、それが30分ほど続きました。ホワイトボードも大いに利用されました。山中比叡平でも連歌の実践ができないものだろうかと期待させる声もあるほど、充実した講演会でした。

この講演会は、録画されています。ご要望があればコピーできます。コミセンまでご連絡下さい。（大木文雄）